会報
札響くらぶ
2017年10月 第80号
編集・発行／札響くらぶ　〒064-0931 札幌市中央区中島公園 1-15 札響事務局気付
ホームページ http://sakkyoclub.net/sakkyoclub/

第19回札響くらぶサロン

台風もよけて通る　熱のこもった素晴らしい演奏

2月の「オール武満」に期待

第19回「札響くらぶサロン」が9月18日（月・祝）、豊平館の2階広間で開催されました。この日は台風の直撃が予想されていました。豊平館を会場にして行われるのは今回で5回目になります。明治の香りを残す、落ち着いた雰囲気の、この会場はとりわけミニコンサートにはふさわしいと感じている方も多いのではないでしょうか。今回もまた57名もの参加者がありました。

第1部は札響くらぶ顧問の八木幸三さんに、9月から来年2月までの定期演奏会の聴きどころをお話していただきました。いつものようにユーモアを交えた、楽しくわかり易いお話でしたが、お話の中心は何と言っても2月の「オール武満」。札響は以前から武満作品を数多く演奏していて、代表作の「弦楽のためのレクイエム」、「ノヴェンバー・ステップス」をはじめ、映画「乱」、テレビドラマ「波の盆」の音楽も演奏しているとのことでした。札響が武満作品と深い関係にあるのは、岩城宏之が札響の正指揮者、音楽監督であったことと大きく関わっていると思います。

それにしても「武満」が正規の音楽教育を受けていないこと、ジャズやシャンソンから音楽に入り始めたこと、さらには「弦楽のためのレクイエム」が日本人評論家に酷評されたのに、ストラヴィンスキーの「ベリー、インテンス」という賞賛？によって手のひらを返すように評価が上ったことなどなど興味深い裏話が次々に出てきて、参加者は食い入るように聴いていました。

アンコールはバッハの「ラルゴ」

第2部は札響の第1ヴァイオリン副首席奏者、飯村真理（いいむらまり）さんによるミニコンサート。今回は前回の小野木遼さん同様、ピアノ伴奏なしの完全なる独奏。たっぷりとヴァイオリンの音色を味わうことが出来ました。私たちがうっとりと聞きほれていた分、飯村さんは大変だったと思います。なにせ一旦弾き始めたら、休みはないのですから。しかも三曲ともかなり重い曲のように感じました。ステージ横に水の入ったペットボトルが置いてあったのも、後になって深く納得しました。

クライスラーの「レチタティーボとスケルツォ・カプリース」では、前半と後半の対比を感じることが出来ました。この曲を演奏した後のお話で、「カプリース」は「奇想曲」と訳すこと、10月29日にキタラでコンサートを開く前橋汀子さんが飯村さんの先生であることを知りました。二曲目のプロコフィエフの「ソナタ　ニ長調」も輪郭のはっきりした、力強く、厳しさを持った曲のように感じました。三曲目はバッハの「無伴奏パルティータ第2番」。「シャコンヌ」だけでも長大で大変な曲なのに、約30分をかけて全曲を演奏してくれました。「シャコンヌ」以外はあまり聴いたことがないことに気づかされました。

「ブラヴォー」の声と鳴りやまない拍手に応えて、飯村さんにとっては予定外であるというアンコールも演奏されました。バッハの「無伴奏ソナタ第3番」から「ラルゴ」。

八木顧問のプレトーク

第3部は演奏を終えたばかりの飯村さんを囲んでの交流パーティー。感動を伝えたい人や直接お話を聞きたい人から引っ張りだこで、なかなか放してもらえないテーブルもあったようです。この日は札響の楽員さん3名（青木晃一さん・白子正樹さん・関美矢子さん）も聴衆として参加してくれました。その方たちも含めて、音楽談議に花が咲き、秋の夜長9時半ころまで交流パーティーは大いに盛り上がりました。

この交流パーティーでは決して豪華な食事が供されるわけではありませんが、美しい音楽を聴いた後の、ここでのひとときは毎回この上ない「心の贅沢」と感じています。

会員／村山英朗

飯村さんを囲んで

次回のご案内

第20回札響くらぶサロンは1月21日（日）午後6時より豊平館にて開催します。

12月～1月定期演奏会　名曲シリーズ

演奏会を楽しく聴くために

八木幸三（札響くらぶ顧問）

第605回定期演奏会
12月1日（金）19：00
12月2日（土）14：00
指揮　マックス・ポンマー
独唱　針生美智子（ソプラノ）
富岡明子（メゾソプラノ）
櫻田亮（テノール）
久保和範（バリトン）
合唱　札響合唱団
合唱指揮　長内勲

針生　美智子　©深谷義宣

富岡　明子

櫻田　亮　©Ribaltaluce

久保　和範

マックス・ポンマー　©Y.Fujii

■J・S・バッハ
クリスマス・オラトリオより
第1、第2、第5、第6カンタータ

バッハが残した3つのオラトリオの中では最も規模が大きく、音楽的にもすぐれているのがこの作品で、全曲は6部からなる64曲で構成されている。オラトリオの名で呼ばれてはいるものの、実は6つの教会カンタータを1組にまとめたもので、一貫した筋はもっていない。今回は、第3、第4部を除いて演奏されるが、各部は独立したものと考えて良い。このオラトリオの基調は「喜び」であり、トランペットや太鼓を効果的に用いて祝祭的雰囲気を醸しだし、舞踏の精神が内包する音楽は生き生きとした世俗性があり耳にも馴染みやすい。いかにもクリスマスらしい華やかな明るさを持つ第1部、パストラル・シンフォニーの名で親しまれている序奏に始まる第2部、救世主の誕生を知って東方から訪ねてきた博士たちの物語が第5、第6部となって続く。

第606回定期演奏会
1月26日（金）19：00
1月27日（土）14：00
指揮　マックス・ポンマー
ピアノ　小菅優

■ラウタヴァーラ
鳥と管弦楽のための協奏曲
極北の歌

ラウタヴァーラは現代フィンランドの代表的な作曲家で、メリカントに師事したのちジュリアード音楽院で学んでいる。8つの交響曲をはじめ、明朗で澄みきった作風が彼の持ち味。この曲は、テープに録音された鳥の鳴き声と管弦楽が共演するというもので、スケール豊かに歌われる弦の音色と鳥たちの鳴き声が幻想的な世界を創出してくれる。3楽章から成り、第1楽章「沼地」、第2楽章「憂愁」、第3楽章「白鳥たちの渡り」と題されており、特に管楽器の明滅と鳥たちの鳴き声がシンクロする世界を金管と弦の豊かな響きがつつみこむ終楽章は感動的だ。楽章に付けられている標題は、それほど大きな意味を持っているとは思えないが、全体を通して透明な清涼感が漂っている。むしろ、標題や音楽の起伏は、鳥たちを眺める人間の内面を表わしているかのようだ。

■モーツァルト
ピアノ協奏曲第24番ハ短調

ザルツブルグの大司教と決別し、ウィーンに移ったモーツァルトにとって、それまでの権力の庇護から独立するためには、自力の演奏会である程度の収入を得なければならなかった。1782年から開催されたという予約音楽会は、彼のクラヴィーア演奏を伴ってウィーンの聴衆に熱烈に歓迎された。

その中でピアノ協奏曲第24番ハ短調は、ピアノ協奏曲第20番ニ短調と並び希少な短調作品。また主題の斬新さやオーケストレーションの内容においても、それまでの協奏曲にはない革新的な作品と言える。この協奏曲のリハーサルに立ち会ったベートーヴェンは、「私たちは、これと同じことをもう二度とできないだろう。」と言ってため息をついたという。

■メンデルスゾーン
交響曲第3番イ短調「スコットランド」

一昨年、メンデルスゾーンの交響曲第2番「讃歌」を壮麗な演奏で聴かせたポンマーが、作曲者の交響曲の中でも最も人気の高い第3番「スコットランド」を指揮する。メンデルスゾーンは、17曲の交響曲を残したが、そのうち最初の12曲は早熟だった少年時代に書かれた小規模な作品で、その後の5曲に番号が付けられ一般によく知られている。しかし、番号順に作曲された訳ではなく、この曲は作曲家最後の交響曲となる。ただし、作曲に着手したのは第4番「イタリア」より以前である。明るい色調を放つ「イタリア」に比べ、「スコットランド」は、作曲者がメリー王女の居城であったホリドール遺跡を訪れ、さびしくも美しいスコットランドの風景と女王の悲劇を重ね合わせながら、その神秘的な雰囲気を音化した短調で書かれている。

4つの楽章が切れ目なく演奏される一大幻想曲ともいうべきこの作品を作曲者が創設した音楽院のあるライプツィヒ生まれのポンマーが、どうドライブするか注目のプログラム。

マックス・ポンマー　©Y.Fujii

小菅　優
©Marco　Borggreve

札響名曲シリーズ
田園から運命へ
2月3日（土）14：00
指揮　マックス・ポンマー

■ベートーヴェン

交響曲第6番ヘ長調「田園」
交響曲第5番ハ短調「運命」

「第5番」と同時期に書かれた交響曲第6番は、性格の違う双生児のように言われるが、確かに「第5番」は動的で凝縮性があり、「第6番」は静的で広がりのある趣を感じる。ベートーヴェン自身の相反する性格が、それぞれに内包されているのかもしれない。しかし、この二つの作品のDNAには共通性もある。例えば第1楽章の1小節目のリズムは8分休符の後、8分音符が3つ続き、フェルマータが動機や主題の区切りをつけて本格始動すること。主題の動機がその後の展開部で利用しつくされるのもしかり。そして、何よりもこの2つの作品が後生の作曲家に極めて重大な影響を与えたこと、言い換えれば音楽史を変えてしまうほどの作品であったことだ。

「第6番」はベートーヴェン自身が「田園」と名付け、楽章ごとに「田舎に着いたときの楽しい気分」と言った叙景的な標題を持たせている。この曲に物語性まではないのだが、ベルリオーズの「幻想交響曲」の元祖でありロマン派交響曲の先駆けをなしていることは確かで、さらに「交響詩」の原点とも言えるかもしれない。楽器編成でも「第5番」同様、ピッコロやトロンボーンが新たに登場するのも興味深い。いずれにしても苦悩を乗り越え自然賛歌への境地に達したベートーヴェンの精神性をじっくりと味わっていただきたい。

「第5番」は、ベートーヴェンの交響曲の中でも最も緻密に設計された作品であり、その主題展開の技法や「暗から明へ」というドラマチックな楽曲構成は後世の作曲家に大きな影響を与えている。冒頭の動機「ジャ・ジャ・ジャ・ジャ～ン」は、たった2小節、4つしかない音なのに指揮者によって別物になってしまうような作品は他にあるだろうか。メンデルスゾーンがゲーテの前で「運命」をピアノで弾いたとき、ゲーテは「人を驚かすだけだ、感動させるというものじゃない、気違いじみている。まるで家が壊れそうだ。」と言ったそうだ。当時としては、ゲーテでさえこの曲が斬新なハードロックに聞こえたのではないだろうか。

マックス・ポンマー　©Y.Fujii

札響の第9
12月16日（土）14：00
12月17日（日）14：00
指揮　広上　淳一
独唱　中村恵理（ソプラノ）
中島郁子（メゾソプラノ）
吉田浩之（テノール）
甲斐栄次郎（バリトン）
合唱　札響合唱団
札幌大谷大学芸術学部
音楽学科合唱団ほか
合唱指揮　長内　勲

■モーツァルト

交響曲第9番　ハ長調

今回はちょっと洒落たプログラミングだ。モーツァルトとベートーヴェンの第9交響曲なのだが、同時代に生きた二人の交響曲の違いの大きさを改めて知らされる。

モーツァルトの第9は、彼が13歳の頃の作品。2回目のウィーン旅行で8曲ほどの交響曲を書き上げ、ザルツブルクに帰郷した後、今度はイタリア旅行に出発した1769年頃の作品で、作曲がザルツブルクでおこなわれたのか、イタリア旅行中なのか、はっきりとしていない。作曲様式でもイタリア風序曲とカンタービレ風の要素が入り交じった折衷的な点などがあり、音楽的にも微妙だ。しかし、明朗で実に整った楽想は、作曲者の神童ぶりが十分に伝わってくる。ちなみに「交響曲の父」と呼ばれるハイドンは、モーツァルトが8歳で書いた交響曲第1番からベートーヴェンの「運命」「田園」の初演あたりを余裕で見届けるまで生きていた。

■ベートーヴェン

交響曲第9番　ニ短調「合唱付き」

ベートーヴェンの第9は、モーツァルトの第9から55年の時を経てつくられている。この間、交響曲というジャンルは飛躍的に発展していった。作曲家にとって単なる演奏会序曲から、一作、一作が人生そのものを賭ける大作になったのだ。

ベートーヴェンの交響曲は第1番から第8番まで1800年から1812年の間に集中的に書かれているが(同時進行で書かれた曲もある)、この「第九」だけは、第8番の完成から十年以上を隔てた1824年に完成している。しかし、ベートーヴェンは、15歳の頃からすでにシラーの詩に音楽をつけることを考えていたのだ。そして1793年には曲を付けることを試み、さらに1809年のスケッチブックには第1楽章第1主題への導入形がすでに書き込まれ、1815年のノートには第2楽章のスケルツォの主題も書き表されていた。つまりこの作品はベートーヴェン音楽の集大成であり、他の交響曲とは違う特別な意味があるのだ。第1楽章は、冒頭から調性が曖昧な空虚な和音から決然とした主題が現れ、ベートーヴェンの苦悩の道筋を辿るかのような厳しい音楽。第2楽章は、それまでの交響曲の緩徐楽章ではなく、スケルツォという型破りな形により攻撃的な楽想を持つ。第3楽章は、彼が愛した不滅の恋人たちを回想するかのようにやさしさと憧れを持ってゆったりと変奏され、ついにバリトン独唱が「友よ、このような音ではない、もっと快いものに声をあわせよ、喜ばしいものに」と高らかに歌い、合唱を含んだ壮麗な第4楽章へと突き進む。

広上　淳一

中村　恵理　©ChrisGloag

中島　郁子

吉田　浩之　©Kyota Miyazono

甲斐　栄次郎

楽員さんに興味津津！⑮

ヴァイオリン奏者　多川智子さんに聞く

ベートーヴェンが原点

♪ 丹波から大阪まで10年間

出身は兵庫県の丹波篠山（ささやま）です。中学生まで篠山にいました。中学校では陸上部に入っていて、ハードルの選手として県大会に出たこともあります。

私は3人姉妹で、末っ子です。姉が二人ともピアノを習っていて、そのピアノの先生のお友達が、ドイツ留学から帰って来たばかりのヴァイオリンの先生だったんです。「妹さんにヴァイオリンはどうですか？」と母が言われ、私は覚えていないんですが「やる！」と言ったみたいなんです。それが3歳半位でした。

一番上の姉は多川響子というピアニストで、関西を中心にそこそこ活動しています。二番目の姉は今は3人の子供の母ですが、昔はエレキベースでバンドをやっていました。

両親は母が少しピアノを弾けるくらいです。習い初めの頃は先生が大阪からレッスンに来てくれましたが、私の他には生徒さんがいなかったので、5歳頃から中3まで毎週、父が大阪まで車で連れて行ってくれました。先生が厳しかったため、それについていかなきゃと母まで厳しくなり、レッスンにも毎回ついて行って、楽譜を見ながら全部録音していました。

小6の時、毎日学生音楽コンクールで、大阪大会の1位になって全国大会に出場しました。この大会には東京の代表として、庄司紗矢香さんが出ていました。

ヴァイオリンをやめたいということは何回もありました。音楽がすごく好きだとか、ヴァイオリンが好きだということではなく、毎年のようにコンクールを受け、次は芸大付属高校への進学…と一つ一つ目の前にある目標をクリアしていくこと、それが私にとってはヴァイオリンでした。

♪ 芸高時代が私の転機

芸大付属高校の3年間が一番楽しかったですね。それまでは音楽をさせられたという感覚でしたが、高校では周りが同じような経験をしてきた人ばかりだったし、能力のある人がたくさんいたので、競って練習もしたし、技術の上でも競い合っていました。1学年40人しかいなかったので、みんな仲がよくて家族みたいな感じ、それ以上の関係でしたね。芸高の3年間が私にとってすごい転機になりました。そこで初めてヴァイオリンをやっていてよかった、楽しいという感覚ができました。

芸大を卒業して2年間はフリーでした。東京でオーケストラのエキストラとかをしていました。一番上の姉がドレスデンに留学していて、親は私にもドイツで勉強してみたら？と言っていました。姉からも一度は留学を経験しなきゃと言われて、ドイツのマンハイム国立音楽大学の試験を受けました。日本でいう院生みたいな扱いでヴァイオリンだけのレッスンを受けることができました。

教室で歌っている3歳の頃。音楽を始めた原点

ドイツ語は勉強して行ったのですが、最初は全然しゃべれなくて、語学学校に通って1年位たった時にやっと普通のやり取りができるようになりました。私の先生はロシア人で、レッスンにもドイツ語にも厳しい先生でした。その先生のもとでは、毎週フォアシュピーレンという発表会があって、そのためのレッスンが週に2回あるんです。日本のレッスンのように1曲だけを持って行っても、全然通用しないんです。「ほかは？これだけ？」「え？1曲だけ？何しに来たの？」毎週そんな感じですから、常に3、4曲持っておかなければならないんです。

ドイツでは、日本と違ってオーケストラのオーディション受けるためのレッスンがあるんです。このオケスタ（オーケストラ・スタディ）

ヴァイオリン発表会
小学校3年生くらい

プロフィール

４歳よりヴァイオリンを始める。東京芸術大学音楽学部付属音楽高校を経て東京芸術大学音楽学部卒業。ドイツ国立マンハイム音楽大学を満点で卒業。第４８回毎日新聞主催全日本学生音楽コンクール大阪大会（近畿、中部、四国）小学生の部第１位。第５０回同音楽コンクール中学生の部２位、京都・愛知学生コンクール金賞受賞。第９回神戸国際学生音楽コンクール（弦・管・打楽器総合）優秀賞受賞。２００７年、２００８年大阪モーツァルトアンサンブルとベートーヴェン、モーツァルトのヴァイオリン協奏曲をソリストとして共演。２００８年京都ＡＬＴＩホールにてソロリサイタルを行う。これまでに松田淳一、小杉博英、椙山久美、浦川宜也、景山誠治、ローマン・ノーデルの各氏に師事。
２００８年、札幌交響楽団入団。

がレッスンの中に組み込まれているんです。日本では授業でもレッスンでも、そのようなものは一切ありませんでした。例えばベートーヴェンの6番交響曲のこの個所とか、シューマンの2番のこの部分とか、9曲くらいが決まっていて、それが世界共通の課題になっているんです。それに向けてのレッスンがドイツでは普通にあるんです。オーケストラのオーディションを受けることが当たり前になっていて、日本とはオーケストラに対する考え方が違うなあと思いました。

♪ 夫と母に支えられ

夫は共通の知人の紹介で出会いました。音楽のことには詳しくはないんですが、音楽のいろんなことに興味を持ってくれる人です。結婚したのは4年前です。2年半前に東京に戻ることになったのですが、子供もできていたし、私が札響をやめるという決断はどうしてもできなかったのです。夫は「これはもう単身赴任でやるしかないよね」と言って、私を受け入れてくれました。夫にはとても感謝しています。出会った時は音楽のことは何も知らなかったのに、今では東京から名曲コンサートや定期公演を聴きに来てくれます。

札響は旅公演が多いので、娘のために母親が一緒に住んでくれています。私は自分の至らないことが多すぎて、母におこられ、姉や夫からもいろいろ言われます。母や姉にはむかつくんですけど（笑）、夫は社会の中で厳しく生きているせいか、こうあるべきだということを教えてくれて、私もそれを素直に受け止めることができます。私は割と暗くてネガティブな人間なんですが、夫は九州の人間ですごく明るいところがあるんです。そこに助けられて、私にはものすごく大事な支えになっています。

ドイツには2年いました。大学の時から日本のオーケストラに入りたいと思っていたので、必ず2年で帰って来ると決めていました。夏休みに一度日本に帰ってきた時、札響のオーディションを受けました。それが初めて受けるオーディションで、初めての札幌でした。札幌は気候もドイツと似ているし、札響に入れたらすごくいいなあと思いました。入団が決まったのは10月ですが、マンハイムの最後の試験が2月にあるので、それを受けて卒業してから3月に入団しました。

大学4年、丸の内で。「街角に音楽を」団体による

♪ インスタグラムに「いいね」

今、0歳児から聴けるコンサートを自分で企画しています。保育園で演奏したり、「お茶会コンサート」と名付けてアフタヌーンティー付きで、30名くらいの小さいところで演奏したりしています。それが私には大きな力になっています。オーケストラの素晴らしさは何にも代えられないもの、一人では作れない感動が全身に降りかかってくるもの、それなのに大半の方々がコンサートホールには足を運びにくいんですね。だからこそ「そうじゃないよ、もっと気楽に行けるよ」ということをママにも感じてほしくて取り組んでいます。個人でやるのとオーケストラでやるのとでは全く違うものですが、音楽の素晴らしさ、クラシックの素晴らしさを、形を変えてでも発信していきたいと思っています。

私の趣味の一つにインスタグラムがあるんですが、このお茶会をアップすると全国からすごい反応が来るようになりました。常に「いいね」が平均500くらいで、多い時は800とかいくときもあり、フォロワー数も今は5800になり、病み付きになってます（笑）。静岡や愛媛の人から「ここまで来てやってほしい」とか、「札幌に住んでいれば聴きに行けるのに」とか、クラシックを聴きたい人がこんなにいるんだと思いました。

趣味と言えば、今は冷え症が強くお灸と円皮鍼を毎夜やるのも日課です。

娘は今2歳ですけれど、ヴァイオリンにはちょっと興味はあるみたいです。「練習だからあっちに行ってて」と言うとそれでも覗いてきて、「お母さん、キュッキュッってやってるね」って。実家に帰った時には、小さいヴァイオリンに触らせたりしています。夫は「まずピアノを習わせて、そこからヴァイオリンとかをやらせたら」って言うんです。

実は私、キャリアウーマンに憧れていた時期があって、会社員で総合職で、バリバリ働く女性っていいなあと思っていました。娘から違う世界を見せてほしいという気持ちもあります。芸術文化の素晴らしさがわかる子であってほしいとは思いますが、むりやり音楽をさせたいとは思っていません。

イタリアの楽器「ジュゼッペ・テストーレ」1690年のもの

肩当て。上の写真が肩に当たる側。下はヴァイオリンを挟む側。これをする人しない人がいるようですが、多川さんには必需品。

♪ 甘い音色のテストーレ

今、私が使っているヴァイオリンは「ジュゼッペ・テストーレ」という、イタリアの楽器で1690年のものです。以前は「ジャンパッピスタ・ヴィヨーム」という1855年くらいのフランスの楽器を使用していましたが、フランスのものと比べると、音の出方が違っていて何とも言えない甘さがあります。

ベートーヴェンとブラームスが圧倒的に好きです。ベートーヴェンを弾き始めるとヴァイオリンを始めた時の音楽の原点に戻り、なぜ自分はヴァイオリンだったのかが分かります。ベートーヴェンはバッハよりも私にはピタッと来る感じです。だから、ベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタに力を入れたいですね。

聴いている人がどう感じるかということはいろいろあると思うんですが、そういうことをあまり気にせず、聴いている人たちにパワーを与えられるように自信と覚悟を持って発信していきたいと思います。皆さんには、心に豊かさや彩り、さらに日常では味わえない感動を札響の演奏を聴いて感じてほしいと思っています。演奏している私たちと聴いている皆さんとが一緒に感動できれば、きっとさらにすごいものが生まれると思います。

8月25日（金）

担当／井上・村山。塚田・中居

第６０２回定期演奏会に思う

プログラム構成の妙

演奏会にでかける楽しみのひとつは、どういう意図で曲目が配置されているのかを探ることである。そのような意味で第６０２回札響定期演奏会は当事者の意気込みが聴衆にひしひしと伝わってくる出色、ご機嫌のプログラム構成であった。少なくとも僕にとっては興味津々であった。

ベートーヴェン円熟期の書法が作曲者特有の倫理感を高らかに謳いあげる「レオノーレ」序曲第３番、思考プロセスに入る以前に音符が縦横無尽に飛び跳ねる神童モーツアルトの協奏交響曲Ｋ２９７ｂ、思索を重ねた末の職人芸が渋く重厚な光を発するフランクの交響曲ニ短調。性格の異なる3曲をさばく指揮者の手腕に大いに期待が寄せられた。

感情移入を抑えた、早めのテンポによる「レオノーレ」序曲は壮大なソナタ形式の均衡美をねらったのであろうか。当日の導入曲として破綻なく、手堅くまとめることを意図したものと思われた。楷書風のたたずまいが聴く者の襟を正した。ただ、例えば舞台裏からトランペットのファンファーレが聞こえたあとのフルートによる全音符の旋律(２７９小節から２９４小節)などはもっとゆっくりと情感たっぷりに歌ってほしかったなあ、という若干の欲求不満が残った。

当日、僕が最も楽しみにしていたのは協奏交響曲であった。楽想の豊かさ、才気煥発さにはいつも唖然とさせられるモーツアルトであるが、これぞ天才の代名詞ともいえる名曲。のちのウィーン時代の成熟とは一線を画す、疾走する遊び心にいつも酔わされるのだ。

ソリストは札響の首席奏者

やはり早めのテンポでの導入部、表情の淡泊さに意外な印象を抱いた。もう少し、喜怒哀楽がはじけてもいいのでは・・・。しかし、そうした違和感は音楽が進むにつれてすぐに払拭された。４人のソロ奏者が主題を奏でそれぞれの楽器の音色が交錯した瞬間、会場の空間が和やかな幸福感で満たされたのだ。協調する音符群が心地よい。続く第２楽章でのやや寒色系のオーボエの哀しげな表情、生きていることの喜びを確認する瞬間でもあった。そして変奏曲という器を借りて所せましと駆け巡る主題、作曲者の才気は第３楽章で頂点を究めた。この作品についてとびかう真贋のかげぐち何のその、モーツアルトの魅力満載ではないか。

ひらめきの赴くままに書かれた協奏交響曲と対極に位置するフランクのニ短調交響曲は、ヴァイオリン・ソナタとともに作曲者の最も重要な作品と評価されている。深く潜行する思索と凝りに凝った職人技が晩年に花を咲かせたのであろう。器用でもなく、あか抜けもしないが、底光りを発する響きは休憩前とは別の世界を展開した。循環形式に対する知識はおぼつかないものの、プロフェッショナルの手法といぶし銀の輝きは素人の僕にも十分伝わってきた。

そしてマーラーやＲ・シュトラウスは別として、日ごろ僕たちが耳にする機会の多い交響曲で余り使われたことのないイングリッシュ・ホルンとハープが強烈なスパイスの役割を演じていたのが印象的であった。

指揮のスダーン氏にとってはフランクが本命だったのであろう。事実確信に満ち、腰のすわった立派な演奏であった。しかしそれ以上に、性格の異なる3作品の持ち味がそれぞれ見事に描きつくされ、そうした魅力をわずかの時間差で堪能できた喜びが大きかった。

会員／村岡　範男

青木さんと石田さんを追いかけて

蘭越への汽車の旅

遠隔地の私にとり、札幌からの遠足旅は憧れでした。今回少額賞与の有効活用と梅雨からの解放を思って参加しました。朝10時、札幌駅集合。参加者は10余名です。皆さんこの珍客を暖かくお迎え下さり、遠路の緊張もほぐれます。まずは快速で小樽まで。ホームは人でいっぱい。皆蘭越行なら…　残念、大半は人気の小樽でした。小樽からは倶知安へ、そのころから天気も晴れに。ひとつひとつ止まる各駅の旅。古い駅舎やさびた階段が緑の中佇む姿は深い味わいがあります。「いいちこ」のＣＭのようなこの「わび鉄」、なかなかオススメです。山中から垣間見た深い青い海が光を受けて輝く様は、本当に一生ものでした。そうそう、松の見分け方も教わりました。エゾ松、赤松、唐松、皆様判別できますか？

倶知安からは長万部行へ乗り換えです。ホームでレアものを二つ見付けました。ニセコ山系の水を使った、ご当地ペット茶「うらら」と昔の発車ベルです。このベルはいくつかの小ぶりの鐘（カリヨン）を鳴らすもので、北海道鉄道１２０周年を記念して置かれました。自然に列車に乗りたくなる音に、昔の人の感性を思います。このホームも人でいっぱい。何せ次は一両編成の車両、すわっ！朝のラッシュの混み様でした。今人気のニセコも通り、１時すぎに昆布駅到着。何と言っても腹ごしらえをしてと駅直結の「幽泉閣」という温泉宿へ。食事は全て蘭越米使用で野菜も肉も皆超美味。おまけに今回は生ビールで乾杯も！往路の疲れも吹き飛びます。その後はとろとろ泉質の温泉へ！食べて飲んで温泉、もうここは天国でしょう

青木さん、石田さんともに

天国の後はいよいよメインの演奏会へ。会場のパームホールまでは「羊蹄国道」を5分ほど歩きます。風は秋、キリギリスも鳴き、傍らにはタンポポ＆クローバー。日差しは夏で、遠くからは鶯の声も…　途中かの羊蹄山も見えました。開拓時代は森と岩ばかり、先の見えない辛さにふと見上げるとそこには羊蹄山があった、と聞きます。

ホールは窓枠まで全て木の造りの、吹き抜けの、小さな礼拝堂の様でした。外の緑、ピアノの黒、ヴィオラのあめ色が映える落ち着いた空間。間近で奏される美しい音。休憩にはお菓子にお茶も。何という満ち足りたひとときでしょう。前半後半各2曲はあっという間。

終演後には2人に1人が当たる大抽選会もあり、「札響くらぶ」は10人のうち7人に蘭越米が当たりました。「札響くらぶ」は運もなかなかです！奏者二人のお見送りを受けて、和やかに話をしながら、集合写真も撮りました。こんなに近しくお話が出来るのも会員ならではの特権でしょう。

復路は4時間でしたが、余韻や高揚感から話も弾み、札幌まで楽しい時は尽きませんでした。

会員／辻　ユキコ

札幌とＰＭＦのこれから

ＰＭＦ組織委員会会長
札幌くらぶ会長
上田文雄

札幌56年の歴史、ＰＭＦ28年の歴史、それぞれが私たち市民にとって欠かすことができない文化財産となっていることは、衆人の共通認識になっている。私たちの札幌が歴代の情熱的指揮者のもとに、またキタラという素晴らしい音楽環境を与えられ演奏活動を展開する姿は、多くの音楽専門家らから羨望の的とされ、市民に幸福な満足感を与えているといえよう。そして札幌及び個々の楽員は単なる音楽団体・音楽家・芸術家というにとどまらず、札幌市民・北海道民にとって最良の音楽教師としての地位を獲得している。その実力の程は、過日「札幌芸術劇場ホール」の来年10月こけら落とし公演を担当する若き鬼才バッティストーニの超躍動的・刺激的指揮のもと、実に鮮やかな生き活きとした彩あふれる音色と演奏をキタラに響かせ、満席の聴衆を圧倒的に魅了したことに表れていると私は確信している。私たちは素晴らしいオーケスラを持っている。

一方ＰＭＦは、レナード・バーンスタインの提唱で90年以来毎年７月、世界の若き音楽家たちが平和(pacific)を奏でる楽器を携えて、私たちの町札幌に約１ケ月間結集。Ｍ・Ｔトーマス、ハイティンク、ムーティー、ルイジ、ゲルギエフなど超著名な指揮者と、ウィーンフィル・ベルリンフィルあるいは米国のメジャーオーケストラの首席演奏家らを教授陣に迎え、私たちの誇る芸森野外ステージとキタラホールを中心に、音楽を芸術を人生を学び伝える教育が施されてきた。今年28回目を終えたところだが、すでに世界79か国・地域延べ３４００人の修了生を世界の楽壇に送り出し、私たちの札幌でも楽団員の約一割はＰＭＦ修了生が占める。

PMF ピクニックコンサート　ＰＭＦ組織委員会提供

ＰＭＦは米国のタングルウッド（１９４０～）、ドイツのシュレースヴィッヒ・ホルシュタイン音楽祭（１９８７～）と並んで世界三大教育音楽祭と称されるまでになった。バーンスタインはタングルウッドで才能を見出され、欧州でホルシュタイン、アジアでＰＭＦを教育音楽祭として創設提唱し実現させた。「残ったエネルギーと神が与えたもうた時間を教育に捧げ私が知っていること全て・・特に若い人たちと分ちあうべきだ」と札幌で語り、その年のタングルウッドを振り終えバーンスタインは生涯を閉じた。

―なぜＰＭＦが札幌で―

バーンスタインはなぜこの札幌でＰＭＦを創設したか。スポンサーが大幅変更し、新たに札幌市が共催することとなったＰＭＦが、今後の方針を検討する際、創設の原点を顧みることは重要なことだ。これは音楽監督ゲルギエフとの間で話題となった事でもあるが、ＰＭＦがアジアにおける教育音楽祭だということ。日本・中国・韓国・台湾・ベトナム・タイ・インド・インドネシア等々の国々で西洋クラシック音楽の素晴らしさを伝承し分ちあうこと、その方法としてアジア諸国の演奏家人材を発掘し資質向上に貢献することだ。だから、ＰＭＦアカデミー生の数もアジア枠を設けアジア出身の演奏家を育てる音楽祭の特徴を持たせる必要があるのではないか。

ＰＭＦ組織委員会提供

札幌がアジアの楽壇へ貢献をすることで、アジアにおける札幌のプレゼンスを確立してゆく。そのことが、音楽ばかりではなく様々な文化的・経済的関係発展に貢献できる。このコンセプトの確立と明確化は今後のスポンサー獲得のうえでも有効だろう。

―札幌とＰＭＦの新たな関係構築の方法―

そして地元の札幌がホストオーケストラとしての役割を果たす、楽員が教授陣に加わりアジアの音楽家を育てることに札幌が貢献する、ＰＭＦ30周年に向けて議論を始めたく思う。札幌とＰＭＦの関係がほとんど無関係の関係であったことを改め、教育音楽祭の内容に札幌がコミットする関係を築いてゆくことが検討されるべき時期に来ているように思う。名称も「ＰＭＦ札幌」と改め、札幌の本拠地札幌で開催されるＰＭＦという主張を明示することが必要だとも思う。

来年10月には「札幌芸術劇場ホール」が完成し、本格的オペラ・バレエ公演が可能となり、札幌の活躍の場が更に拡大する。

札幌とＰＭＦは両者の関連付けを積極的に指向することにより、力強い音楽文化都市の成熟を目指さなければならない。

キタラロビー内ギャラリー第二弾開催

「札幌交響楽団ものがたり―創立からの軌跡」展

昨年、創立55周年を期に開催された「札幌交響楽団ものがたり―荒谷正雄とその時代」に続き、今年は第二代常任指揮者ペーター・シュヴァルツのの活躍を記録する写真、ポスター、プログラム冊子などの資料が展示されています。

期間は12月３日(日曜日)まで、大ホールでの公演開催日にギャラリーで開かれています。

札幌交響楽団　次期首席指揮者

マティアス・バーメルト　就任決定

２０１５年から首席指揮者を務めたマックスポンマーさんの任期満了にともない２０１８年４月よりマティアス・バーメルトさんが首席指揮者に就任します。札幌とは２０１４年と２０１６年定期演奏会で共演しています。来年４月の名曲シリーズと第６０８回定期演奏会が首席指揮者就任記念演奏会となります。

クルーセル、ミヨー、ブルッフ、そしてブラームス。クラリネットの室内楽の珠玉の名曲を、素晴らしいメンバーと様々な編成でお届けします。ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、クラリネットの4重奏と、クラリネットと各弦楽器、ピアノによる3種類のトリオ。これらを一晩で聴ける機会はなかなかありません！ぜひ聴きにいらして下さい。12月12日、ふきのとうホールでお待ちしております。

12月12日（火）　19:00開演　ふきのとうホール
一般3000円（当日3500円）学生2000円

ありがとうございました

札響トランペット副首席奏者　松田次史さん

34年5ケ月演奏を続け、8月に退団されました。「札響くらぶの皆さまと僕たちオーケストラは長い間、共に歩んできました。おかげさまで私はステージで演奏に集中できました。サポートをしていただいたなと思っています。ありがとうございました。」

スタッフの活動報告

○7月8日（土）
「札幌市内中学校吹奏楽部招待事業」八条中44名
白石中52名

○7月25日（火）
会報「札響くらぶ」79号発行

○8月21日（月）
第4回運営会議

○8月26日（土）
「札幌市内中学校吹奏楽部招待事業」北栄中38名
真栄中44名

○9月18日（月）
第19回札響くらぶサロン

○9月20日（水）
第5回運営会議

○9月21日（木）
札響練習見学会

○9月23日（土）
「札幌市内中学校吹奏楽部招待事業」平岡緑中38名

本棚の隅から19

今年はフィンランドの独立100周年なので、札幌でもあちらこちらで記念行事があった。TVでもフィンランドをテーマにした番組が目につく。ロシア革命の混乱に乗じて独立を宣言した1917年を独立年としている。その後もスウェーデンと領土問題で争ったり、ソ連との争いで領土の10分の1を失ったり、周辺の国との軋轢もいろいろあったようだけれど、1994年にはEUに加盟し2000年にはユーロを導入して、現在は独立と平和を維持している。私の感覚では同じ北方圏なので近親感があり、深い森と輝く湖水の美しい国だろうと想像している。

そんなこともあって、30年以上本棚に入れっぱなしだったヘルシンキ・フィルのプログラムを引っ張り出してひもといてみた。

前身のヘルシンキ・オーケストラ協会として設立されたのが1882年なので1982年に100周年を記念して初めての来日公演があった。札幌公演は北海道フィンランド協会の主催だった。

「ヘルシンキ・フィルハーモニー管弦楽団日本公演」
1982年1月26日（火）
北海道厚生年金会館　18：30
プログラム
指揮　ペルティ・ペッカネン
ピアノ　舘野　泉
シベリウス
交響詩フィンランディア op26
グリーグ
ピアノ協奏曲イ短調 op16
シベリウス
交響曲第2番ニ長調 op43

「フィンランディア」を聴くと、モーリス・ド・ヴラマンクの風景画が心に浮かぶ。重く暗いキャンバスの中にひと筋の光が差しているような画面を…

また、グリーグのピアノ協奏曲が印象的だった。当然のことだけれど聴き慣れた曲もナマで聴くと音の迫力に圧倒された。

オッコ・カムも来日していたのに地方都市の公演は、みんなペルティ・ペッカネンの指揮だった。でも、ピアノが舘野泉さんだったから、まあ、いいか！

話は飛んで、2014年にJOFC総会が山形市で開催された。演奏会の後、懇親会へ行くバスの中で山形交響楽団のヴァイオリン奏者、舘野ヤンネ君と隣り合わせたので「お父さんの大ファンなの、お元気ですか？」と聞いたら、「今日は大阪です」と、ぶっきらぼうな答えが返ってきた。

会員／井上明子

編集後記

▼札響くらぶサロンのコンサートでは飯村真理さんのヴァイオリンの典雅な音色を聴かせていただきました。豊平館の広間に合った真っ赤なドレスがとても素敵でした。定期演奏会では味わうことの出来ない魅力があります。あなたもぜひ体験してみませんか？（上野）

▼来年10月にOPENする札幌文化芸術劇場のこけら落としに、オペラ「アイーダ」を指揮するアンドレア・バッティストーニさんが先日、札響を指揮した。その躍動感に圧倒された楽員さんの演奏もすごかった。（吉武）

▼鴨々川は、護国神社キタラ豊平館の脇を流れ、藻山橋で駅前通りを横切り東へ創成川に。すすきの七条寺町通り散策と洒落、これからの季節は年寄りの散歩にうってつけ。昼公演終演後は歩け歩け、ちょっと一休みで行きつけの店で一献。秋の夜長に如何。（朽木）